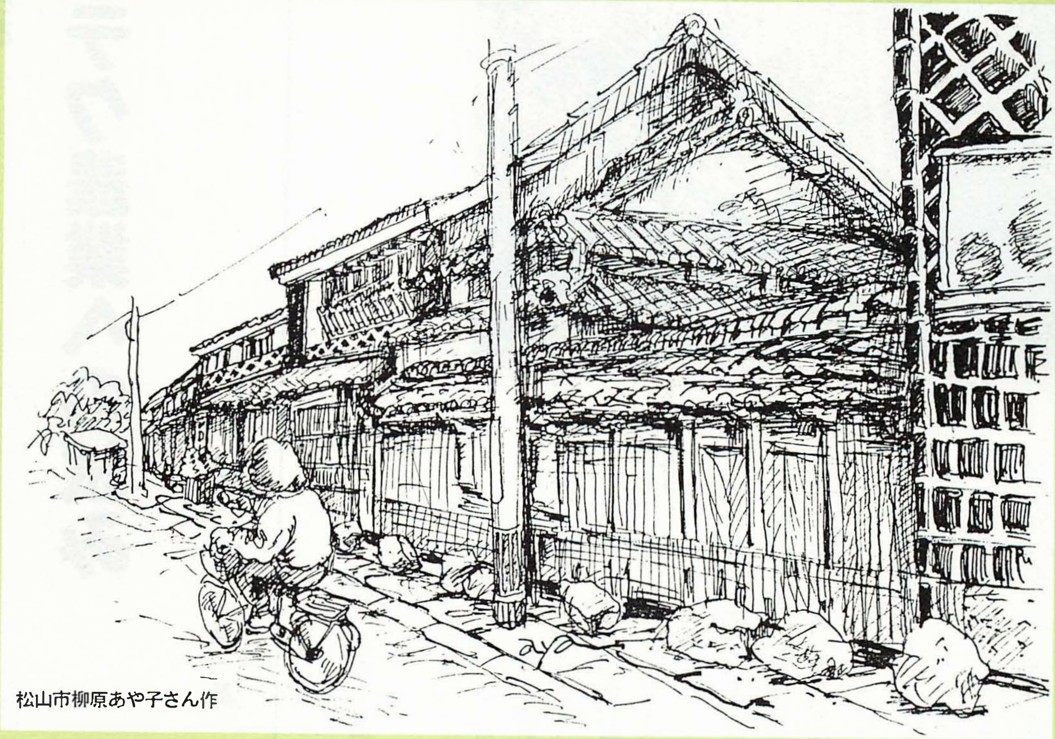
まちづくりネットワーキングえひめ

舞たうん

VOL 22



松山市柳原あや子さん作

㊕ 夢はふくらむ ㊑

◆ハイテク農家への試み
伊方町／門田　治満………… 2
◆夢は大きく広がって
長浜町／のごころの会……… 4
◆育て！創作獅子舞太鼓
西条市／上野　友治………… 6
◆日本語を教える喜び
伊予市／冨田　政幸………… 8
◆観光農園に託す
内子町／上田　道子………… 10

研修レポ
・全国地域おこし塾………………… 12
・Welcome！ 船方総合農場……… 14
・マオリとキウイの国……………… 16

REPORT
・地域づくり研究サロン…………… 18

元気印レポート
・ウェイブ／野村町………………… 21
・ホンネ共和国／宇和町…………… 22

ふれあい広場
・リレーでちょっトーク…………… 24
伊予三島市、松山市から
・インフォメーション（あじさい祭）
…………… 26
・パソコン通信／TOWNたうん… 27

研究会議 News Letter
・地域づくり学んで三年よもやま話ノート
／宮本　俊一…… 28
・明日の地域づくりとわたしの夢
／檜皮　孝夫…… 30
◆まちづくりセンター
平成3年度事業計画………………… 32
◆まちセン人事消息………………… 36

特集・夢はふくらむ

ハイテク農業への試み

伊方町 門田治満

☆十五年目の農業

混沌とする世界情勢、技術格差の中での世界経済、押しとどめることのできない農産物自由化の流れの中で、今私たちのまわりは、大きく揺れている。

今、私はとかくさびしく見られがちな片田舎で、マイナー産業と思われやすい農業にどっぷりつかって十五年目を迎えようとしています。

ハウスの中での門田治満さん

☆私の生きる道

農業のやり方としては、いろいろな方法があると思います。大自然の中で自然の流れるままに行う農業。（南予では、明浜の無茶々園、広見町の無村塾など）また、近代的センスで産業として自立しうることを目ざして行う農業。これらいろいろな農業のやり方は、行う本人が将来を見つめ、明るい豊かな農村のためにと確信して行っていることですから、どちらが良いとか悪いとかいうような事柄ではないと思います。どちらかというと、村づくりとか村おこしなどというと、前者の方がクローズアップされがちですが？

十四年間農業と取り組んで、私は後者の方を選びました。そしてこの考えで新しい村づくりができると確信しております。

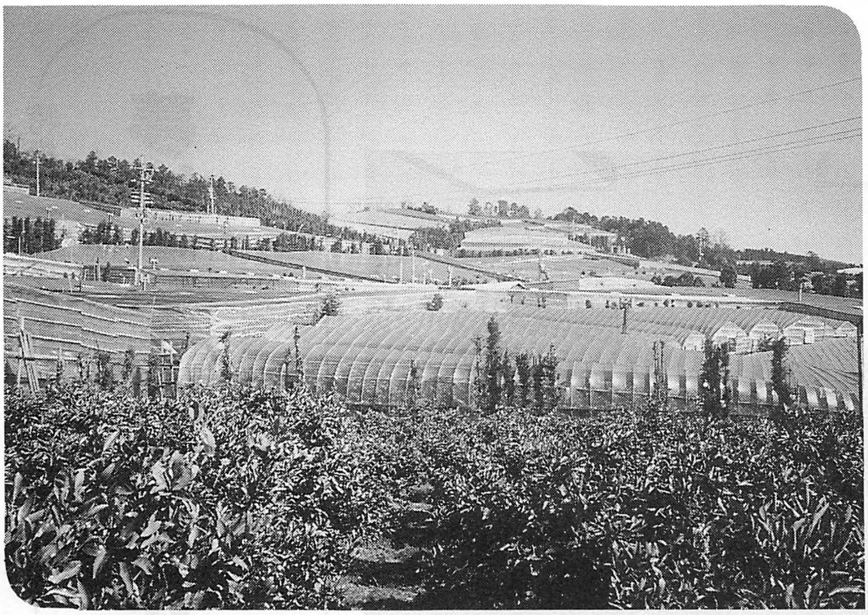
☆ハイテク農業とは

私は、事務所にはコンピューターがすわり、ワープロ、FAX、コピー機、ポケットベルを必要とするそんな農業を行っています。私の日曜日は休みとしています。

ハウスの状態が一目瞭然。

地区でも農休日という休日が月一回ありますが、産業というシステムの中で休日をとることは、農業でも可能だと思います。またコンピューターは、ハウスミカンの生育制御、経営簿記などに使っています。

五年前に導入した頃は「なんで農業にコンピューターなんか。」という考えが圧倒的でした。今はだいぶ変ってきていると思いますが。なぜ私が、こういう経営をやろうと思ったかは、農業誌ではありませんので省略させていただきますが、基本的には、農業はもっと変っていかなければならないと思っているからです。そして、新しく自立した農業という産業の中で、若い農業経営者が育ってくれるということを、確信しているからです。



☆二宮忠八翁で まちづくり

私が参加させていただいている組織の中に、「青年会議所《JC》」というのがあります。「われわれJAYCEEは、社会的、国家的、国際的な責任を自覚し…英知と勇気と情熱をもって明るい豊かな社会を築き上げよう」という理念のもと、活動している団体です。

そして今度、まちづくりの一環として、わが国航空界のパイオニア二宮忠八翁を取り上げています。まちづくりの起爆剤にと考え行っているものです。

仕事の中では、やっぱりきちっと利益を出し、こういう団体の中で豊かな町づくりに参加してゆく。こういうメリハリのある環境の中でやってゆきたいと思います。

☆そしてこれから…

戦後より「今ごろの若い者は」と言われ続けながら、日本は高度成長をなしえてきました。そしてこれからも、一律金太郎あめのような考え方ではなく、いろいろな選択肢をもって、それぞれの違った顔をもった、まちづくり、人づくり、産業おこし、を考えていくことが大切だと思います。そして、これらに積極的に参加していきたいと思います。

伊方町全景

特集・夢はふくらむ

夢は大きくひろがって

長浜町のごころの会
下田美澄

▲いつもにぎやかに「豊年おどり」の練習風景

●のごころの会は生まれて三年半

この名前ですか？これはね、わざわざ、平仮名で書くことにしているんですよ。漢字にすると〔野心〕です。野心（やしん）のむき出しは嫌でしょう？　野心は心の奥にひめて、何をも生み出し、何をも受け入れて土に戻す野原にも似て、心豊かに、ひろく暖かく、そして奢らず……をモットーにしているんです。「理想は高し」なのです。

この私たちの、のごころの会は地域の片隅に生まれた、たった十四人の婦人で構成する小さいグループですけど、れっきとした「会則」があるんです。勿論、私たちが作ったんですよ。

●聞いて下さいますか？　では。

第二条

本会は、大和地区の婦人有志が、自主的にアイディアを出し合って、郷土発展のために努めるとともに、会員相互の長所を生かし、伸ばしあいながら、親睦をはかる。どんな中傷や困難にぶつかっても皆で励ましあい、助け合って目的を達成する。

大げさですか？　でも笑わないで下さいな。

お互いが誘い合って、自然な形で集まった私たちは、元はといえば、小学校の学芸会にＰＴＡで音楽劇をした物好きたち。農協婦人部に属している、のごころの会会長の菊地さんの「女の『豊年おどり』をしようや。」との提唱にとびついたのでした。いや、とびついたのは二、三人だったかな？　とにかく、このように目的ができてつぎに会則が生まれたのでした。

『豊年おどり』保存会の人から一生懸命習ったけれど、いくら私

たちが逆立ちしたところで、保存会の人達のようにうまく踊れるはずはありません。基礎的なことを習ったあとは、しだいに、のごころカラーに染まり、つまり、ちまたの評をかりて表現すれば、お色気もあり、面白味もある『女の豊年おどり』が生まれたのです。

こうなるともう、シメタもので少々の中傷や困難などは……といいたいところですが、やはりそこは女、何度かうちひしがれることもありましたよ。ところがありがたい事には、私たちのそれぞれの連れ合いたちがいつも陰から力付けてくれるんです。そして地域からも励ましの声が届くんです。

元気付けられて、十四人の個性が発揮されました。『豊年おどり』の衣装を縫う人、小道具を集める人、音楽をテープに調整する人、唄の文句を聴き取り文字に直す人、ジョークを飛ばして仲間を勇気付ける人、腹が減っては戦はできぬといそいそとそのほうの世話に励む人……といった具合いでした。

家庭では妻や母親であり、社会の一員でもある私たちは、さまざまな悩みを持っているんですけど会員同志で、より良い解決にむけて助言を求めたり、助け合ったりする事もしばしばなんですよ。

●夢は大きな、のごころの会

> **第四条**
> 本会の目的を達成するために、次の事業を行う。
> ・『豊年おどり』をはじめとして、郷土の文化を掘り起こし、継承していく。
> ・施設訪問をするほか、ボランティア活動を進める。
> ・花一杯運動を進める等、地域の発展のために実践を積む。

公民館の花壇の整備や夏草刈り、駅のホームやその近辺の清掃などをした時は、皆がどんな顔をするかなと思うと、なぜか心がときめきますねぇ。これが、ボランティアの喜びというものでしょうか。

私たちの『豊年おどり』にも、その喜びがあります。これまで、お祝い事や、白滝老人ホームや大洲育成園の訪問、そして山口県からの出石寺参拝客のためや、地域のお祭り、などなど、十指を越える舞台を踏みました。

私たちは郷土の『豊年おどり』を自分のものにしたいのです。見るだけでは喜びに限度がありますし本当に自分たちのものとして誇りを持って人に語る事はできません。踊ってみて初めて、その躍動感、協調の喜び、労働の素晴らしさ、先人との繋がりなどが、感動となって伝わるのです。そして、今や夢は広がる一方。将来は東京までも踊りに繰り出したいと…。

●魅力は何といっても…

自主自立の会計なのです。全くどこからの援助も受けていない。だから遠慮なく自由に動けますね。

もう一つ自慢したい事は、私たちのリーダーの素晴しさ。太っ腹でいつもワハハ笑ってばかりいるようでいつの間にか皆をぐいぐい引っ張っている菊地会長。もめ事、悩み事を一手に引き受け、旨くカジを取る後藤副会長。やりくり上手な東大蔵大臣。ここでは最年長で、しかも保育所長を二十年もやっている私ですが、とてもこのような名リーダーになり切っていませんよ。教えてもらう事がいっぱい。これも私にとっては、大きな魅力の一つなのです。みんな何らかの〝得〟をしているようです。

おしまいまで聞いて下さいましてありがとうございました。またいつかどこかでお逢いしましょう。

特集・夢はふくらむ

育て！創作獅子舞太鼓

西条市　上野友治

◆西条市加茂地区

西条市といえば「秋祭り」と言われるように全国的にも有名な、だんじり（一部太鼓台）が繰りだす「西条まつり」が行なわれています。

ではなぜ西条市で獅子舞なのか？という疑問が出てくるわけですが、私の住んでいる市の南部、つまり石鎚山のふもと加茂地区だからです。

昭和三十一年、西条市と合併するまでは、新居郡加茂村として栄えてきました。当時は三千人近くいた人口も今では三百人余りという典型的な過疎の地区です。ここに古くから伝承されているのが「獅子舞」というわけです。

◆獅子舞との出会い

加茂地区には現在、荒川・千町・八の川にそれぞれ特色のある獅子舞が伝承されています。私の住んでいる荒川地区では、毎年十月十日、地区の氏神八幡神社の秋の大祭で、悪魔祓いの獅子舞が披露されています。

地域の小学生たちと

私は小さい頃から、この獅子舞を見て育ち、獅子舞をすることにあこがれるようになりました。残念ながら私の小学校時代は、そのチャンスが回ってきませんでした。なぶりこ（太鼓の叩き手のことを獅子をなぶる子供という意味で、なぶりこと呼んでいる）は、小学生が務めたのですが、人数が二人と決まっていたので順番が来なかったのです。

◆保存会による伝承活動

昭和四十七年頃から、若者の流出が著しくなり、太鼓や獅子の指導者が地区を離れ、とうとうなぶりこがいなくなってしまいました。このままでは伝統の獅子舞がすたれてしまいます。危機感を持った地区の人達は、二年後公民館を中心に「加茂地区郷土芸能保存会」を作り、後継者の育成をはかりました。

そして昭和五十年、当時中学生だった私は、荒川下分の日野秀一さん（故人）の指導のもと、二人の小学生と一緒に獅子舞を習いました。これが私と獅子舞との長いつきあいの始まりとなりました。

◆青年団での伝承活動

昭和五十八年に大学を卒業した私は、青年団に入団しました。地区の盆踊りや運動会などに参加するようになって、地域とのつながりが増すにつれて、何か青年団として存在価値のあるものをやってみたいと考えるようになりました。

そこで思いついたのが、獅子舞の伝承活動でした。荒川・千町の獅子舞に取り組んでみようというものでした。春に行なわれる青年文化祭での発表を第一の目標として、週二、三回の練習を昭和五十九年の暮れに始めたのです。

全員が一丸となって頑張りました。荒川については私が、千町は

地元の人に指導してもらいました。その時、地域の人々が差し入れをしてくれるなど、暖かい応援もありました。文化祭当日は、努力のかいあってか、見事な発展をすることができました。

その後、昭和六十年から六十一年にかけて、愛媛のまつり、成人式、西条市青年のまつり、身体障害者を乗せて走る「ひまわり号」イベントへの参加など、様々なところで発表することができました。今、考えてみても、この取り組みは大変思い出深く充実した毎日でした。

◆小・中学生への指導

年号が昭和から平成へと変わった頃、後継者づくりに取り組もうということで地元の小・中学生に教えることになりました。小学生には太鼓を、中学生には獅子を教えました。この子供たちが大人になった時、さらに次の世代へと伝えてくれることに想いをこめて。

しかし、私が小学生時代には百人を越えていた地区内の小学生は僅か六人に減り、今後増える見込みはほとんどありません。この獅子舞を加茂だけのものにしていたのでは、いずれ忘れ去られる時が来るのではないかと、子供たちに指導しながら考えるようになりました。

◆創作獅子舞太鼓への取り組み

そんな時、市の青年団で新たに創作太鼓に取り組もうという話が持ちあがりました。ここ数年で活動が停滞し、解散か存続かの岐路にたたされた青年団の最後の賭けであったのかもしれません。加茂の獅子舞を何とか西条市の郷土芸能にと考えていた私でしたが、それはなかなかむつかしいように思われます。それならば形を変えて創作獅子舞を作ったらどうだろうかと考えたのです。

現在、愛媛県内の多くの市町村では創作太鼓が作られていますが、獅子舞と太鼓を合わせた新しい郷土芸能はほとんどないはずです。この創作獅子舞太鼓を西条市の新しい郷土芸能として作り上げることは、青年団の活性化につながるだけでなく、加茂地区の獅子舞を後世に伝えるという意味でも一石二鳥ではないかと考えました。また、この取り組みには無限の可能性があるようにも思います。まだまだ始まったばかり、試行錯誤の連続ですが、限りない可能性を求めて頑張っていくつもりでいます。

かつて加茂青年団で地域の中での存在価値を求めて獅子舞の伝承活動を行なったように、今度は市全体へと枠を広げて、西条市更には愛媛県の中での存在価値を見いだす活動をしてみたいと思います。今まで自分がやってきた獅子舞を加茂地区だけのもので終わらせるのではなく、更に新しく沢山の人に伝えていってほしい。

そして、地域の若者に地域に根ざした活動の良さを分かってもらい、郷土を愛する心を持ってもらいたい。そんなことを考えながら私は、その夢の実現に向けてマイペースではありますが、青年団の仲間と共に日夜頑張っています。夢が実現となる日を信じて…。

荒川地区八幡神社での荒ワザ！

特集・夢はふくらむ

日本語を教える喜び

伊豫市　冨田政幸

●少年時代の夢－中国へのロマンをいだいて

昭和二〇年から三〇年代に「国際文化画報」というグラビア誌が刊行されていた。当時、一般の雑誌が紙質のよくないザラ紙だったのに比べ、このグラビア紙は、光沢のある紙を使い、写真も鮮明であった。中国が朝鮮戦争に参加するや中国に関する記事・写真が多く掲載されるようになった。

上海のベアリング工場で増産に励む労働者、集団農場「合作社」の農民、そして何よりも私の心をとらえたのは、モンゴール草原とシルクロードの地に住む遊牧の人々であった。いつの日か、彼の地へ行ってそこに住む人々とお話をしてみたい。私は、そんな夢をいだくようになった。

そして、夜になると、ラジオのスイッチをひねり、彼の地から、はるばる電波にのって飛来する美しいメロディーの中国語に耳を傾けていた。当時は、何をいっているか全然理解できなかった。私が小学校五年生頃のことである。

この頃に抱いた私の夢は、まだ実現できていないが、その後もずっと持ち続けている。

●ボランティアの喜び－中国からの帰国者との出会い

中国残留孤児がかつて日本の中国大陸進出・侵略の結果によるものであることは、すでに御存知のことと思う。

日本と中国が念願の「日中平和友好条約」を一九七八年八月一二日に締結して以来、私と同世代の人々が中国人の配偶者や子供を連れ、新しい日本での生活に希望を託して、この松山へも続々と帰国して来た。しかし、これら帰国者の方々は、日本語を修得しないで帰国されていた。日本語をマスターしていなければ、日本での生活は非常に不便で仕事もできないし、自立もできない。何とか日本語の修得という大関門をのり越えてほしい。そんな願いをいだいて、五年前、私は「日中友好かけ橋の会」(帰国者の方々の自立をお世話する超党派のボランティアグループ)に参加した。

さて、日本語の修得であるが、発音・表現・拍のとり方など中国語の環境の中で育った帰国者の方々にとっては、非常に難解なものである。私の中国語の能力で責任ある務めを果たすことができるであろうか。不安であった。帰国者の方々の将来の生活がこの日本語修得如何にかかっている。ボランティアとしての責任の重大さを痛感していた。

しかし、「你好（ニイハオ）」の一言で帰国者の方々と心が通じあい、学習会も日本語で理解できないところを中国語で補う方法により、学習効果を上げることができた。

ことばが少しでも通じあえば、それに伴ない心が通じ、喜びが通じあっていく。そして自分自身の心が豊かになっていく。

帰国者の方々の真面目な学習態度、生活態度を見るにつけ、私が教えるよりも、帰国者の方々から教えられることの方が多く、そのことが私自身の生きがいにもつながっていったように思える。

世俗的な出世をしたり、大金をもうけるのも一つの人生であるといえるであろう。しかし、それに

も増して心を豊かにもって隣人愛に満ちた人生を送るすばらしさを学ぶことができたことは、私にとって大きな収穫であった。

　また、ほんの少しのタレント（能力）でも、それを使えば、大きな力になることを身をもって体験することができた。反面、すばらしい能力をもっていても、それを隣人のために使わなければ、それは無きに等しいのではないだろうか。

　私の担当した帰国者の方々は、それぞれ新しい職を得て、自立の道を歩まれている。

●夢は大きく限りなく―アジアの隣人と共に

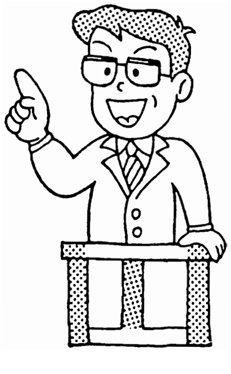
　国際化時代を迎え、若い人達の中で英語の他に、中国語、韓国語を学ぶ人が輩出していることは誠に喜ばしいことである。

　私が高校二年の時、ＮＨＫ「ラジオ中国語講座」が開講した。私はさっそくテキストを購入し同級の友に見せたところ、「金にならんことを勉強して…」と変わり者のように見られた。当時は、そんな時代だったのである。その頃、私はもう一つ夢をもっていた。「朝鮮語講座」を開いてほしいとＮＨＫに手紙を書いた。返事はなかった。しかし、数年後、東京でＮＨＫの役職の方と会う機会があり、その旨申し入れたところ、「今は、諸般の事情で開講できないが、あなたの夢はいつの日にか実現できるでしょう。」と言われた。事実、二十四年後、昭和二十九年四月「アンニョンハシュニカハングル講座」として日本の大空に韓国語の電波が飛び交ったのである。

　私は、これからの若い人にアジアのことばをぜひ学んでほしいと思う。中国語・韓国語、そして、ベトナム語等東南アジアの言語である。私たちが隣人を理解するためには、その国のことばを学ぶことがその近道であるからである。

　これらアジアの国々は、かつて日本が軍靴でその土地を汚したところである。償いは永遠に続くだろう。しかし、私たちが真にこれらの国の人々と心を通じあうことができれば、和解が成立し、永遠の平和へと連がっていくことだろう。

　もう一つお願いがある。ボランティア活動に参加していただきたい。人生の真の喜びは何かを知っていただきたい。そして、あなた自身の生きがいを見い出してほしい。



中国からの帰国者の自立援助についてのお問い合わせは、

「日中友好かけ橋の会」
佐伯まで
☎0899-25-5648

特集・夢はふくらむ

観光農園に託す

内子町 上田道子

今年も確かな手応えで、四十五アールの桃畑に、春の陽差しを一杯に受けて桃の花が咲いた。毎年入れている堆肥が効いたのであろう。

桃は、観光農園には不向きといわれ、県内にはこの園だけと思う。しかし、私にとって桃は大切なもの。桃ほど楽しませてくれる果樹はない。春には花を楽しみ、収穫期にはたわわに実った果実を楽しみ、味覚を楽しむことができる。園にいるだけで満足するし、人がやらないことに挑戦して楽しむって良いですネ。

地元園児に囲まれた上田道子さん

● 交流に支えられて

「お元気ですか。去年来たときには、おなかの中にいた子供がこんなに大きくなりました。」と、嬉しそうに紹介してくださったこと。「魚を釣ってきたぜ」と、クーラー一杯の鮮魚を頂いたこと。「これは、お客さんからの手土産よ。時には手作りのお弁当まであるんぜ。」と近所の人との会話。これが百楽園を経営している私達夫婦とお客さんの付き合いです。サービスの基本は、おいしい桃、健康な果物を提供することと思っています。丹精込めて育てた桃を、ただお金との交換で終わるのはあまりにも寂しい限りです。消費者と農家の親しい交流があり、顔が見えて、それで生活ができればとても素晴らしい。その反面では、お客さんの反応が手に取るようにわかり、怖くもあるのが本音です。

開園以来五年間の農園経営は、こうしたお客さんに励まされ、支えられ、あっという間のことでした。サービスは、人に言われてするものでもなければ、押し付けるものでもないことが漸くわかりかけた昨今です。「また、来てみたい」と思って頂けるよう、さり気なくお迎えし、楽しんで頂けることを心掛けています。

● 農園の観光化

『百楽園』って、なぜ付けられたのですか」とよく聞かれます。「百歳になっても楽にならないから、百楽園と付けたんだそうです」とは友人の弁。石でも投げてやろうかと思う程、腹だたしい思いがしなくもないが、言われてみれば何と無く当たっているようです。しかし、やっている本人は、百姓を楽しみながら、来園者には百とはいかなくとも、一つでも多くの

「農業と農村のこと」を楽しんでいただけたらと、思いを込めて付けた名前が「百楽園」です。

「立地条件が悪いから」、「田舎だから」と、周りの人たちは、私達がやっている観光農園を、あたかもモルモットのように観察されているようですが、そこは生え抜きの百姓のこと。田舎だからこそ、やる気さえあれば何でも出来ると思っています。

何をやろうとしても、ただ失敗を恐れて何もしないよりは、自分が持っている夢と情熱、そして努力する以外には何も出来ないと思うし、努力したからといって必ず成功する保障は何もないけれど、努力しなかったことを後悔するよりは、何倍も楽しい人生が送れそうです。世の中、常に自らの能力以上の目標に挑戦し、努力することによってのみ、新しい夢が描けるものと信じます。

● 河内地域の中で

百楽園がある河内（かわのうち）は、内子町の北西部、双海町を結ぶ県道を五キロメートル、麓川をのぼった所で、六十余世帯の農家からなる小集落である。葉タバコと椎茸の生産を中心にした農村です。過疎と高齢化は、どこにも負けない社会現象の中で、日毎に農業への期待が薄れ、子供達に引き継ぐことが出来る自慢は少なくなった地域。

河内のこのような環境の中で、新しい動きも見える。麓を流れる川は、近年特に汚染が目立つ。子供の頃の川の奇麗さは、どこの村も同じであったと思うが、農村の近代化が進むにつれて川は放置されてきた。「今手を付けなければ大変なことになる。」、「先人が残してくれた土地や自然を、今に生きる者が喰い潰して生活を支えるだけでは申し訳ない。」と、「麓川を美しくする会」が誕生した。藪を刈り、紅葉を植え、少しづつ自然の美化に目を向けようと、若い人たちの頑張りが見え始めた地域です。何かやってみたいとささやかな動きが出た昨今です。

河内に生まれ、育ち、この地で生きる私達は、地域社会の変動から逃げ遅れた人種かも知れません。しかし、折角逃げ遅れたのであれば、「逃げ遅れて良かったなぁ」と、そんな生き方を期待しています。田舎だからと言って、あれが無い、これが不満とマイナスのことばかりを考えてみても決して地域はよくならない。田舎だからこそ、河内だからこそあれがやれる、これができると、「足し算」をしながら地域を考えたいし、農業を考えたいものです。

私達は、お金はないけれども、自由に使えるすごい時間持ちです。百の楽しさを自慢しながら、まだまだやれる良い意味でのまだ型族人間で頑張りたいものです。今日も桃の収穫期の賑わいを思いつつ百楽に耽って、農作業にいそしんでいます。

お客さんと共に

ツーリスト・ファーム百楽園

・桃　四五アール
・赤ぶどう　四〇アール
・巨峰　一一〇アール
・開園期
　桃　七月中旬
　ぶどう　八月中旬
・電話
（〇八九三）四三－一六〇七（自宅）
（〇八九三）四三－〇二六六（園）

☆お気軽にどうぞ
おまちしてまーす！

山ちゃんの「まちづくり見聞録」
『全国地域おこし塾研修交流会議』

現在、地域リーダーの養成を目的として開催されている「塾」って、全国にどのくらいあると思われますか？

㈶地域活性化センター（東京都）が昨年八月、各都道府県に対して行なった調査によると、期間の長短を問わず、継続的に開催されている「塾」（平成二年度中に設立予定を含む）については、合計四六一塾あったそうです。

その概要はというと、設立主体から参集範囲・塾生数・運営費・活動内容に至るまで、かなりの差はあるものの、目的とされている地域リーダー養成に変わりはなく、まさに、〝地域は人なり〟〝まちづくりは人なり〟を実感させます。

■地域おこしと人材養成

三月七日、『全国地域おこし塾研修交流会議』の会場となった日本都市センター（東京都）には、全国から地域おこし塾関係者四五〇名が集い、地域おこしのための効果的な人材養成の在り方についての意見交換が行われました。

今回、この会議を主催した㈶地域活性化センターでは、創造性とバイタリティにあふれる人材育成を目的とした「全国地域リーダー養成塾」を、平成元年度より開設しています。その塾長でもあられる東京工業大学名誉教授・阿部統氏から、第二期生に対して「地域づくりには何が必要か？」とアンケート調査をしたところ、次のような結果が出たとの報告がありました。

1、意識改革（自己改革）
2、住民の意欲（住民参加）
3、行政マンの資質（型やぶり）
4、仲間づくり（異生活・異活動体験者）
5、地域資源の見直し（人材・etc）

以上ベスト5の内4つが人的要因となっていることからも、地域づくり活動には、如何に人の占めるウェートが高いかが、窺えます。

この日、阿部氏は参加者に、ある方を紹介されました。その方は第一期生であった愛媛県I村のM氏で、M氏は「塾」終了時に次の言葉を残されたそうです。

東京工業大学名誉教授
阿部　統 氏

M氏曰く、「私は愛媛に帰ったら、4つの〝ない〟を使わないようにする。その4つの〝ない〟とは…

◇前例がない
◇法律にない
◇予算がない
◇命令（上司の）がない

である。」…と。

阿部氏はこのことに凄く感動されて、あたかもぬるま湯に浸かっ

の巻

(財)愛媛県まちづくり総合センター　山岡　強

ていることの多いような行政マンに対して、「巧みに使い分けているようだが、実際には知恵がない。そして意欲もないんだ。」と指摘されました。

なんとも耳の痛い話です。

さて、「地域づくり」には何が必要なのか？…ということなんですが、結局次の５つの〝識〟が必要だそうです。

◎認識
◎意識（意欲）
◎見識（真似をしない）
◎組織（仲間）
◎知識（情報）

〝地域おこし〟は簡単であるが〝地域づくり（持続すること）〟は難しい。

■地域おこしにおける塾活動の役割

事例として、次の「４塾」の発表がありました。

☆「西川塾」
山形県西川町（昭和六〇年度開設）

☆「いいたて夢創塾」
福島県飯館村（昭和六一年度開設）

☆「まほろば未来塾」
奈良県（平成二年度開設）

☆「かわなべぼっけもん塾」
鹿児島県川辺町（平成二年度開設）

これらの「塾」は、自治体が仕掛けたものから、民間が自主的に活動をおこしたものまで様々でしたが、最初に述べたように、目的としているところは結局同じで、〝地域リーダーの養成〟、強いて言えば、〝意識おこし〟の場となっているのです。

事例発表者　「かわなべぼっけもん塾」大薗秀己さん　「まほろば塾」山口恵美さん　「いいたて夢創塾」赤石澤正信さん　「西川塾」松田武志さん

事例発表の中である方がこんなこと（格言？）を言われました。

「明るいムラおこし、暗い家庭」。

これには、私も思わず「プッ」っと吹き出してしまいましたが…、と同時に、ハッとしたのは私だけでしょうか？。

そういえば、以前ある方がこんなことを言っておられました。

「自分の家庭（家族）が愛せないで、自分の町が愛せるか。」

〝マチづくり〟〝ムラおこし〟にとり掛かる前に、大切な一ステップが一番身近なところにあったようです。

Welcome! 船方総合農場

(財)まちづくり総合センター
宇都宮正昭

"船"と"農場"どんな組合せかな？ やっと見えた！ 牧歌的な風景！ 山の裾野に二塔の黒いサイロ、そして取り囲むようになだらかなスロープの牧草地…

ここにユニークさで注目されている《船方総合農場》があります。

とても気さくな 坂本多旦(かずあき)さん

「モゥーモゥー我輩は牛である」〈おいらの農場〉を支えてきたのは坂本の親父なのだ。みんなは坂本社長と呼んでる。今日も色々な地域から研修とか言って我々を見にきている。人は解ってないかもしれないけど割りと気を使うんだよな、モゥ。

「これからの農業は生産だけでなく、加工、流通、交流が大切だ。特に消費者を農場現場に呼び入れ、農業の実態を理解してもらいながら、消費者情報をキャッチすることだ。」と今日もエヒメから来たという若者を圧倒している。大丈夫かなー！ 若者はたまに相づちを打ったり、「なるほど、ムムム」とか言っているが…。

「明日は愛媛の日吉村へ講演に行くんだよ」と、親父が言うと、若者は何か安心したように身を乗り出してきたみたい。

そうそう、ここ数年前からお客さんが増えたな、視察の人とか、春から秋にかけては自然を生かしたイベントもあり、子供たち、家族連れの人々でいっぱい。しかし最近は、講演とかで親父に会えない日が多くなったので寂しいのだモゥ。

―うし君のひとりごと―

山口県の北東部に位置し千メートルの山々に囲まれた盆地の町、人口九七〇〇人のご多分に漏れない米作主体の純農村の町、阿東町がある。

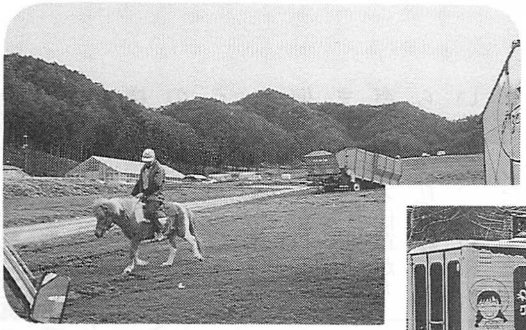
ここに二五〜六年前から「絶対長続きする訳ない」と言われていた〈組織農業〉に果敢にチャレンジされている船方総合農場の坂本多旦さんがいる。

「船方総合農場」は、現在、牛七〇〇頭を初め、野菜、花卉栽培等多角的に経営をされている農業生産法人なのです。

前述したようにこれからの農業は消費者を直接つかむことも大切ではないかと、従来からの「船方農場」はそのまま生産を担当している。そして加工、流通、情報を新設の「みるくたうんkk」そして交流（イベント・バーベキュー）を「グリーンヒルATO」がそれぞれ機能分担しているのです。

「みるくたうん」は異業種、消費者の方から約一億円の出資（株主五四五名）を募り、生産者と消費者が共同で知恵を出しあうという組織体系になっているのです。

農場・事務所全景



年間来場者は約五万人。（うち一万五千人は視察・教育研修者）社員三二名（平均年令約三〇才）、パート二五名で運営。メンバーはUターン者が多くとにかく若い！　若者だけかというとそうではなく、適材適所に年配の方も。

そこに至るまでの経過について坂本さんは、「それまではコストダウンとか規模の拡大の視点しか見えてなかったけど、将来を見据えると消費者とのコミニケーションが必要だと気付き消費者を意識した農場づくりを始めたんだ」と熱が入ってくる。

反面、問題点もあるんだと

「今、年間五万人程の来場数なんだけど、将来は一〇万人程には増えそうだなぁ。ウチは金をかけないリゾート地（0円リゾート開発）を目指しているのに、ある程度の施設も必要になってくるなぁ」

「お客さんがあまりにも増えると、自然とのふれあいを求めてきた人は落胆されるんじゃないですか？」

「計画的に焦らずに、足元を見据えてじっくりとやりたいなぁ。」と言われる坂本さん。色々気苦労も絶えないようです。しかし、坂本さんを取り巻く元気な仲間が増えて、ハッスル！ハッスル！

そして仲間である西川部長と高橋マネージャーのお二人にもお会いすることが出来た。

西　川さん

「スタート時点は元々農業に携わっていた人が少なく、人材育成にも力をいれて、やっと素朴さも出てきてプライドを持てるようになったみたい」

高　橋さん

「我々はモノ（施設）を作り多くの人が来れば果たして活性化といえるのか。ここへ来て、牛、加工場を肌で感じてくれれば、子供たちの将来も変わるかもしれない」

お二人も都会からのUターン者であり、企業的センスに坂本社長のアイデンティティをプラスされて意気軒高である。

夢とロマンに満ちている「みるくたうん構想」は平成五～六年を目処に整備段階とはいえ、町内外から大きく期待されているモデル事業である。

そしてその構想がステップアップすればするほど、企業の経営感覚が必要になってきますが、俗っぽい観光地にならぬよう自然との共生を大切にしてほしい。（老婆心ながら）

暗いイメージの多い「田舎と農業」を発想転換することによって、二十一世紀に向かっての方向性を見いだすべくヒントを与えてくれる所である。

『俺達は食うためにやってるんだ』

最後にガツーンと一発衝撃を受ける、坂本社長のことばであった。

キウィの国とマオリ族

(財)愛媛県まちづくり総合センター
前研究員　豊田　渉

●ぐるっと回れば夏真っ盛り

　成田空港を飛びたって七時間、まだここは空の上。機内の窓から明るい外の光が漏れている。うつらうつらしていたけれどもう九時。何人かの人が目を覚ましていて、時折、窓を開ける仕草がちらほら。私は疲れているのに、飛行機のエンジンはずっと回りっぱなし。「よく疲れんもんだなァ」と感心しているうちに朝食の準備で、機内はそれまで以上に賑やかになった。

　ニュージーランド南島の都市、クライストチャーチで飛行機を乗り継いで、北島の都市オークランドに到着したのは、何と日本を出てから十四時間後であった。

　「地球を五分の一周したら、そこはニュージーランドであった」なーんて。日本は二月の寒い盛りなのに、ここは夏真っ盛り。でも、日本の夏ほど蒸し暑くない。じめじめしていないのだ。

　湾岸戦争の最中、何で国外へとお思いでしょうが、行ったのです。こういう時期だから空いているというのを狙ったんではないので念のため。(申し込んだのは、戦争のずっと前だった)

　よく、国際化国際化と言われるが、本当の国際化というのは、まず自分の住んでいる所をよく知ること、理解することだと思う。自分の住んでいる地域や国のことも語れないでは、本当の国際化とは言えないのではないだろうか。

　その想いを念頭において、八日間の異国体験を少し書いてみたい。

●言葉が、聞こえない?

　今回の研修は、始めと終わりの二日間しか、日本人ガイドがいなかった。つまりは、残りの日程はすべて、同行した石川研究員との珍道中であったのだ。

　何と言っても一番困ったのは、言葉が聞き取れないことであった。こちらは単語を並べての片言ではあったが、相手には伝わっている。けれども、何を言っているのやら判らないものだから、「ごめんなさい、ちょっとわかりません」という始末。疲れれば、ついつい笑顔だけで誤解される仕草まで出てしまう。

　それでも何とか滞在中は一生懸命だったのが、自分でも分かった。とにかく、何を言っているのかを聞き取ろうと必死になっていたに違いないのだから。

　移動中のバスでは陽気な運転手が、道すがらの案内をしてくれるがほとんど理解できない。かろうじて、日本語の説明用ヘッドホンを付けるが、これは主な場所の説明しかないのだ。時折、車内の乗客が笑っているのを聞いて「ニヤッ」とする。回りから見ると、さぞ不気味な光景であったろう。

　日本に帰ってから、よくよく聞いてみると、ニュージーランドは英語でも訛りがひどく、それも早口で喋るということであった。少し気分的には楽になったと思うが、「どうも、しっくりこない。」

●なんでこうなの?

　国が違えば確かに事情が違うのは当たり前とは思うけれども、官公庁は午後四時になると仕事は終わり。社会なども殆どが五時。なんと羨ましいというか凄いというか。どうなっているの?

　ちょうど今は、サ

マータイムを導入しているから実際には一時間早めないといけない。午後九時にならないと日が暮れないから、この時間は長いぞー。

商店街にしても同じで、金曜日の夜には少し遅くまでやっているという。そういえば、観光地にも行ったけれど、土・日に関係なく休みだった。日本人的発想をすると、働かない国民だと思うであろう。

●豊田・本田・三菱？

ニュージーランド国内では、車の生産はしていない。その輸入の八割が日本車であった。中でも、豊田・本田・三菱製が殆どであり、新車は少なく中古車が多かった。確かに国内で生産すれば一番いいとは思うが、農地が国土の殆どを占める農業立国としての姿勢を、垣間見ることができた。

こういう時の私の名前は、すぐに分かってもらえたのは、言うまでもなかった。「マイネームイズトヨタ」「トヨタ？オー、カー！」てな具合になってしまう。

●キウイは鳥、マオリは人？

知るは一時の恥、知らぬは一生の恥とはよく言ったもの。今回の研修中、キウイフルーツの語源を知った。もともとは中国が原産地であり、その感触や色が鳥のキウイに似ていることからついたのだという。

ニュージーランドを語るときに忘れてはいけないのが、マオリ族の存在であろう。古くからこの地に住みついていた原住民であるが、今は外国人との共同生活の中で同等の権利・義務を持って生活している。彼らの奏でる音楽や歌には何とも言えない美しい響きがあり、今でも頭から離れない。

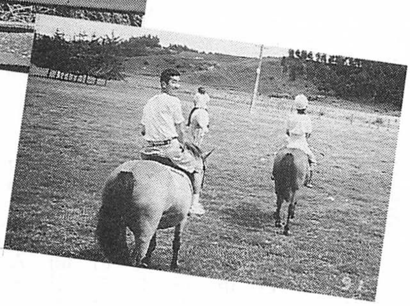
●忘れ得ぬ思い出として

今回の研修の中心は何といっても農場体験（ファームステイ）であった。本当はこのことについてもう少し書かないといけないが、あれこれと書きすぎて紹介できないのが残念である。機会があれば、後日にしたい。

日本の北海道と本州の面積に、日本の人口の三十六分の一の人しかなく、何もかもが広々と感じる。そのせいか、人々は親切で陽気でおおらかである。あの広々とした大草原を見ていると、くよくよ考える気にはならない。

言葉はうまく通じなかったけれど、今回も多くの人々にお世話になった。そして、何もかもが、新しい発見と感動の連続だった。言葉が通じない時のあの真剣な態度、その時の不安な気持ちもあったけれど、度胸をすえてみれば何とかなるという自信も少なからず付いたことは、良かったと思っている。同行した石川研究員には、特にお礼を言いたい。「もう少し英語を勉強して再挑戦したい」と言っていた彼の言葉が今も心に残る。

ことばが分からず、仲の良い豊田さん石川さん



地域づくり研究サロン

★コーディネーター
村上克美さん　〈松山大学経済学部長〉
★アドバイザー
鈴木繁夫さん　〈人間交差店「浪漫亭」店主〉
★パネリスト（順不同）
渡辺浩二さん　〈久万町商工会・経営指導員〉
ヘロン久保田雅子さん　〈㈱バッフォ・文化事業室長〉
小田原巧さん　〈経済連・企画広報課課長補佐〉
垣鍔俊二さん　〈㈱フジ・第３商品部１課長〉
西園寺美恵子さん　〈久万町農業改良普及所・専門員〉
大西博子さん　〈新宮村・大西茶園〉
西村恭子さん　〈松山市・えひめ生活センター友の会〉

「特産品開発は、地域の活性化戦略になりうるか！」

㈶愛媛県まちづくり総合センター
前研究員　石川元英

村上克美さん

鈴木繁夫さん

渡辺浩二さん

西村恭子さん

〈はじめに〉

世は、まちづくりゲーム一色から、少々状況が変わってきているようです。

行政によく見られがちな何百人もの動員をかけての、大袈裟なシンポジウムを開き続けてはきましたが…。時間の無駄だ！との批判の声をあちこちで聞きながらも、ただの時間稼ぎをするように駄弁を繰り返す。この辺りが限界でしょう？

ということで〝本物求め〟まちづくりセンターとしては、「地域づくり研究サロン」なる、少数精鋭による、体裁ぬき、地味にこれからのことを考えるべく勉強会を試みた。

今回のテーマは、『特産品開発は、地域の活性化戦略になりうるか！』。地域活性化策の一役として、大分県の一村一品運動に象徴されるように「ものづくり」が盛んに行われてきた。一体、特産品づくりとは何なのか？の原点から、これらが製品にはなり得たが、はて、商品として本当に生き残っているのだろうか？

これらの現状を探りながら、本当にこれからの地域の活性化のテコとするためにどうすべきか？を中心に、特産品開発の現場、流通の現場、また、消費者の人たちに参加頂き話をすすめていった。

〈基調卓話〉

鈴木　繁夫さん

ふるさと村東京役場「浪漫亭」店主。

この肩書きから、はて…どんな人物であるか、到底伺い知ることはできない。鈴木さんの紹介をするだけで紙面を覆いそうなので、ここでは割愛する。東京のど真ん中で人と人とのふれあいを第一に考えた人間交流の場を、「居酒屋」という舞台を借りて経営している。

特に、日本の社会「しがらみ世界」の中で一番病んでいる行政職員の意識改革のための実地訓練の場として、自治体職員自身を居酒屋店員として、来る客との接待の中から、我が特産品を…我が故郷を語る。

結局、全国の人たちがどれだけふれあうことができるか？どれだけ地域間交流をさせることができるか？こんなことに情熱を注いでいる人物である。

基調卓話の中から…

物産開発は、地域活性化に必要不可欠である。という前置きから、ものづくりというものが、今過渡期を迎えている現状をお話頂いた。

結局、特産品開発というのは、ただ、単に売れるものをつくればよいという行為ではあるが、地域に住む人たちが、身近にある地域の伝統や文化など、地域をもう一度見直すためのものであり、自分たちの地域の誇りづくり、一つでも自信のもてるものをつくりだすという、「夢づくり」である。

その場合、行政も民間もなく、また、老いも若きもなく、みんなの知恵で創出されるべきで、そのことによって、現社会に何となく忘れ欠けていた〝人のぬくもり〟を思い出させ、地域の「こだわり商品」が、味のある「ものがたり性」を含んで仕上がってくる。

そういったものであれば、それを媒体として、物から人への流れを生み、人と人との交流、新しい出会いを結び、ネットワークとして広がりをみせてくる。それが、また新しい情報・知恵を運んできて、さらなる地域へのエネルギーを生み出す。

一時的に売れたとか？どうだったとかいうものは、現象でしかないのである。

多いに悩み苦しみながら「トライ」をしていく時代である。

〈サロントーキング〉

パネリストの発言から…

（渡辺さん）

商工業界の代表として、久万町のまちづくりの一部分としての「特産品開発」を例に取りながら、県内町村部商工会の特産品から、村おこし全般にわたる現状と問題点の発表があった。

特産品開発が地域の活性化の一つの手段として一役を担っているのは間違いない。しかし、これだけでは当然ダメで、村づくりの一部分として考えていかなくてはならない。

生態系住環境の全般にわたって、暮らし自体からいい地域にしていって、いい風土の中から、いい商品が生まれてくるというように複合的に考えていかなくてはならない。

（ヘロン久保田さん）

特産品開発には、内部のものたちだけで考えていくよりも、もっと、ネットワークを広げて外部の風やいろんな人たちの知恵を利用していくことが必要であろう。

また、いいものには、やっぱり「ものがたり性」みたいなものがある。このことも大事なことである。

（小田原さん）

一般的には、特産品の「量の継続性」「質の継続性」「販路の拠点づくり」などの問題があるとは思う。

「つくる」「うる」という二つの観点から…

結局、「つくる」ことへの理念が整理されていないと思う。

大分の一村一品などの成功は、経済効果をもたらしたことによって成功したのではなく、『ものをつくることによって地域に自信の持てるものを創ることであった、これが精神的な地域の活力へ。そして、新たな開発へのエネルギーになれれば成功である』と考えられていた。この辺りを整理することも大切である。

そのための「ものづくり」は、何もないところから作り上げるのではなく、地域には昔から誇りに

西園寺美恵子さん

小田原　巧さん

ヘロン久保田雅子さん

垣鍔俊二さん

大西博子さんご夫婦

なるべき部分、財産と懐めるような一品がある。それらを発掘して地域のなかでつなげ、広げていくようなやり方をすべきであろう。

「うる」という行為の場合は、大量生産でいくことはない。特産品としての地位を確立するというよりも、逆に味が落ちたりする。だから、限定販売というもので、やっぱり基本は対面販売であろう！心をこめて、熱心に売る、そして、覚えてもらう。この辺りが肝心であろう。

（垣鍔さん）

販売業の視点では、県内の特産品を見ていて、面白い商品は沢山あるが、パッケージ形態や表示方法などの問題で売れないなーと感じる。

しかし、吉田町「フルーツフル」のようにやり方によっては、近年大きくのびている商品もある。

やっぱり、ものが売れない、売れないとは言うが、現実的には売れていて、ただ、「売れないものしか作らない」現状があるということだろう。

地域の小売業として、地域の商品（特産品）などを多いに使いたいという気持ちはあるが、地域の情報を受けるパイプがない。この辺りに一番の問題がある。

（西園寺さん）

農村婦人グループを中心とする特産品づくりの現場からの生の声の紹介があった。

「ものづくり」における農村婦人と地域の関わりは、代々受け継いでいる生活技術、伝統文化から〝農村の良さ〟みたいなものを現代にマッチするような形で表現することができる。

ものをつくるという「グループ活動」を通しながら、ものの流れ以上に〝人が育っていく〟という部分がある。ものができることによって人が必ず変化していく。この辺りに特産品開発の意味がある。

農村では、いいものがあっても人材不足という問題はあるが、高齢化の進む農村では、そこにいる婦人やお年寄りをどう高めていくか？この辺りに着眼点をおいて、どう仕組んでいくかが勝負であろう。

（大西さんご夫婦）

お茶の産地・新宮村で、昭和五十八年より完全無農薬でお茶づくりに励んでいるご夫婦である。

さらに、地域のなかでも、村道約二キロに及んで咲き競うあじさいロードを中心にして、「あじさい祭」にて、地域の産物、様々な特産品を地域のお爺ちゃん、お婆ちゃんたちと一緒に自分たちで作りあげ、自分たちの『心の』販売をしている。ここでは売れることよりも、地域内の輪づくりに徹している。

やっぱり『ものづくり』は『愉しみづくり』なのである。

今回のサロンのなかでの「地域活性化への特産品開発のあり方」への議論は、結局、大西さんご夫婦の実践舞台と大いに重なる部分があったと思う。

まさに、地場実践者に勝るものなし。

（西村さん）

一主婦一消費者としての「特産品」に対する率直な意見であった。

買い手も「特産品」には、（勿論中味も大切ではあるが、）その町を感じさせる商品や人の温かさを感じさせる商品を望んでいる。すなわち、その土地で愛され、試されている商品ということである。

〈おわりに〉

以上のような話し合いが行われた訳だが、それぞれの発言者の言葉を聞いても、同じような言葉が何度もくりかえされている。

ただ、「ものをつくる」という行為は、目先の売れたか、売れなかったか？という経済効果といったものは二の次であり、我が地域の誇りづくり、生きがいづくりであることを感じる。

何をもって効果とするのか？といったようなところをもう一度考えるキッカケづくりには成り得た。

今後の話し合いへとつないだ。

次回をお楽しみに……。

企画集団

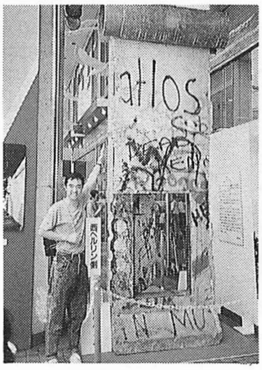
ウェイヴ

WAVE

野村町　土居真砂人

◆「野村町でミニコミ紙、ヤッテマス!ウェイヴです。」田舎にいると、とかく情報に遅れがち。愛媛新聞は、松山などの都会の情報が多いし、「広報のむら」はちーとつまらん。てなわけで、情報発信、コミュニケーション基地として、わが野村町にもミニコミ紙ができてしまいました。その名は「ウェイヴ」。

◆創刊は、昨年の八月で、若者の感性に訴える盛り沢山の内容でした。近くにも、スゴーィ人がいるんだゾっということで、野村町の一番さんをレポートした「ギネス野村」。ベルリンの壁が、いよてつそごうにやってきた感動のレポート。女性心理に深くせまる突撃レポート「ガールズ・ナウ」ほか。



◆つづく二号、三号は、秋のスポーツ、文化シーズン、クリスマスシーズンといった、季節色豊かなものとなりました。わが野村高校が誇る中距離界のエース、岡山志帆選手の密着レポート。秋の地方祭、おたふくさんの由来、オートバイに乗る少女の記録。そして、クリスマスはワインの紹介。今年結ばれたカップルのレポート。暖かいペチカ風の内容となりました。

元気印レポート

◆スタッフは現在十一名で、職業も役場の受け付け嬢、酒屋、文具屋、農業経営者、畜産試験場職員、森林組合員、設計士、建材業、印刷屋と様々。みんな熱いハートを持った若者ばかりで、週一回のミーティングも楽々とこなしています。(なかには、熱が入りすぎて、円形脱毛症に悩まされているスタッフが約一名おりますが…これは例外です。)

◆とにかく書きたいことは自由に、それが「ウェイヴ」のモットーです。こう書くと随分いい加減に思われるかも知れませんが、取り組む姿勢自体は極めてマジメなものです。そして、編集長の考えもキビしく、「好きなことを書け、ただし、おもしろいものを。結果がスベてジャケン。」というものです。何やかやで、第四号が四月の頭に出る運びとなりました。皆さん、応援してくださいネ。

小さな国の大きな夢

ホンネ共和国官房長官

◆ホンネ共和国？

野村ダム建設に伴い、一部水没の憂き目に遭った宇和町明間（人口九百名）に、ダム湖面の泡沫とともに自然発生した独立国の「ホンネ共和国」。独立騒動が進行中のロシア世界のそれとは全く異質の、そして、日本国からの認知もされていない独立国である。

国家要人（閣僚）八名。養魚・茶・縫製・カウボーイ・果実ならなんでもある農・木材・ゆうパック・保健婦取り締まられ役と、それぞれの者が頭となり妻子の糊口を潤している。そしてその正業に見合った大臣のポストを有り難くいただき、世の為人の為に「正業をなげうって」までの覚悟をした地域内活動集団でもある。

◆国家の概要は？

次に独立の活動概要を披露するが、国会の議事録の抜粋によりご判断いただきたい。

質　疑

「国民の間から、ホンネ共和国はその共和国の呼称から、社会主義国家ではないかとの声があがっているが、本当か？」

右から２番目が佐藤総理大臣!!

元気印レポート

答　弁（総理大臣）

「まさに社会主義国家であります。そして、資本主義国家でもあります。自由・博愛をその礎としているので、経済学上の体制の色分けは必要ありません。国民が幸せになれるのであれば、民主的行動でもって、どのような事象にも頭をつっこんでいきます。煙たがられようが、一向に気に掛けないところが偉いと自負しています。」

質　疑

「国家経済は逼迫しているが、予算措置はどうなっているのか。」

答　弁（大蔵大臣）

「赤字国債を本日も発行しました。予算はありませんので…。額面五百円で八枚完売であります。皆さんの目の前にある口汚しに使わせていただきました。今後ともご協力いただきたい。」

明間ホンネ共和国申合せ事項

この会は形式的な考えにとらわれず、会員の自由と主体性を発揮するために、最少限度の「申し合せ」の範囲で運営に当たることとし、次の事項を確認します。

1．名　称
この会は、ホンネ共和国といい、事務所を明間公民館に置きます。

2．目　的
我々の住んでいるこの「ふるさと」をよりよくする為、地域づくりについて、学習と研究を行い、自由に意見を出し合いできることから実行し、より人間らしく暮らすことを目的とします。

3．学習、研究内容
目的達成のため必要と思われることを学習、研究します。
（自然、文化、教育、人権、福祉、保健、医療、観光、農業、林業、商業、工業交通、公害、その他）

4．会　員
この会は地域づくりに関心をもつ人で、役職等に関係なく、地域づくりに熱意のある人なら誰でも参加できます。

5．閣議及び国会等
(1)閣議は、適宜開催とします。
(2)国会は、年次総会とします。（会計年度は１月～12月）
(3)次回の学習研究事項等は閣議及び国会等の席で決めます。
(4)決定事項については、全員が一致団結して事に当たります。

6．運　営
この会に総理大臣１名、その他各種大臣、各種長官及び局長を置き運営します。

7．任期は、国会までとします。

8．会費は、その都合徴収し割カンとします。

9．この申し合せは、必要に応じて年次総会に諮り改正します。

昭和63年１月９日

質　疑

「泡沫のごとく出現した、おかし気な団体が地域内をばっこしている等など、外圧が少なからずあるが、国家防衛はどうしているか」

答　弁（外務大臣、防衛庁長官）

「わが国の軍隊は屈強であります。口鉄砲一発の破壊力は、トマホークミサイルうそ八百発分に相当します。しかも連射が可能ですので、他国籍軍にとっては大変な脅威でありましょう。従って、外圧は問題ありません。一番気掛かりなのは、クーデターであります。」

質　疑

「独立四周年になるが、これまで何をしてきたか。そして、今後のビジョンを表明していただきたい」

答　弁（各大臣）

・全国名水百選「観音水」の愛媛感動の地二十選への推挙。堂々の二位。
・他独立国との国交(双海町在国)・国旗の制定（一万二千円かかった）
・地域間既存団体への提言、アドバイス。
・お祭り騒ぎ指南。

「以上がこれまでの成果であります。

それぞれの具体的なことについては、時間もございませんので、別席にてご説明申し上げます。ただ平成二年度は、総理大臣が地域の総大将に就任しましたので、表立った活動はしませんでした。二足の草鞋はいただけませんから。

今後のビジョンとしては、昔なつかしいボンネットバスを走らせて、宇和町観光の一助としたいと計画しているところであります。」

以上、議事録から

◆国交歓迎！

作家の遠藤周作氏宅に空き巣が入り数百万円が盗まれる事件があった。その時遠藤氏は、「金を盗んだ奴がギャンブルに使うなら許さない。しかし、子供や家族のために何かを買ってやるのなら許してやろう」と語っている。

盗んだ当人への怒りを家族に想いをはせることで、気持ちの転換をはかったとのことである。ホンネ共和国の面々は、盗まれるような金は持ち合わせてはいないが、気分は同じ。損得のソロバンの帳尻は、今は分からない。次世代の者に清算をお願いするつもりでいる。

国交をご希望の独立国は、五百円握って「おいで」ください。

「由利島共和国」との交流

となり町はDIO？Y？

伊予三島市　金崎治信

ある染物屋の前で「おもしろいむらおこしは、どうすればいいのですか？」という問いかけに、私は「濃淡があり、一様に揃わないようにすればいい。そうすればおもしろいムラができますよ。」と答えた。すると、その方はシステム手帳に「メリハリをつけること、一様の考え方をしないこと。（刺激、発想の転換）」と書いてしまった。

何処かで「まちづくりをしようと思うんですが、何が必要ですか？」と尋ねられた。

私はなにも躊躇せず、「〝燐〟と〝木〟で作るんですよ。」と応えた。すると、その方はノートに「〝凛〟と〝やる気〟で創る」と書いてしまった。

粋な勘違いである。

前者は、「村おこし」を「斑(むら)おこし」と、後者は「マッチ作り」を「まちづくり」と勘違いしたのである。

このように「まちづくり・むらおこし」が市民権を得て久しいが、ここで私の素敵な勘違いとすごい偶然について紹介してみよう。

いつだったか国道をとなり町へとドライブしていたときである。私は、まちづくり総合センター好みの素晴らしい且つすごい看板？をみつけたのである。ほんの少し前にはなかったはずである。それは国道上に何気なく設置されている道標であったのだが、それには〝Do it own OFC.（office）〟と書かれてある。はて、DIYなら〝Do it yourself〟だし…。〝自らやるオフィス〟とはなんじゃろ？

赤信号に停められながら、ふと矢印の方を眺めるとアプローチ付きの大きな建物がある。町役場らしかった。私は「すごい町だな。このまちは〝自らやるぞ〟と公然と宣言しているのか。でもよく建設省が設置許可したなぁ。」などとも思いつつ、その上の文字に目をずらした。役場名が日本語で書かれてあった。

百メートルも走ったろうか。照れ笑いをしながら舌を少し斜に出した私は、一瞬アクセルペダルと靴の裏を離してしまった。

ほんの勘違いであった。同じように思われた方は思い出し笑いを、いつかドライブ中に見掛けた方は「あっ。これだな」と。

ただし、くれぐれも振り返ってずっと見たりしないように、〝安全運転〟……。

次回は、あの伊予三島市秋桜塾、塾生岩本利香さんに襷をお渡しします。

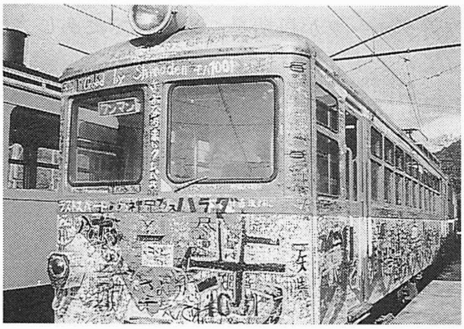
瀬戸大橋の下で……

松山市　柳原あや子

四国アィランド人が、年の初めにちょっと海外へ！

いやー、古い町並みウォッチングに丸亀まで足をのばしたのが、瀬戸大橋を目前にし、ついつい岡山市下津井まで海を渡ってしまったのです。夜景の大橋は、全灯火されてハイテクの美しい線上に、車のライトが切れる事無く静かに流れ、電車も忙しく走り天に上る夢の橋でした。

下津井に渡ったのは、下津井電車を見て帰りたいという事もあり、昨年末まで「赤いクレパス号」と「メリーベル号」が瀬戸大橋を眼下に潮風を受けて走っていたのです。景色は最高。電車はオモチャ箱から飛び出したようにかわいい。そのレールを私は走っていました。ガタンゴトンと来るはずのないレールを気にしながら…。この路線は車社会に押されて廃線となった今。下津井の町並みも歴史ある漁港とマッチして時を忘れる程、情緒たっぷりに渡ることができました。

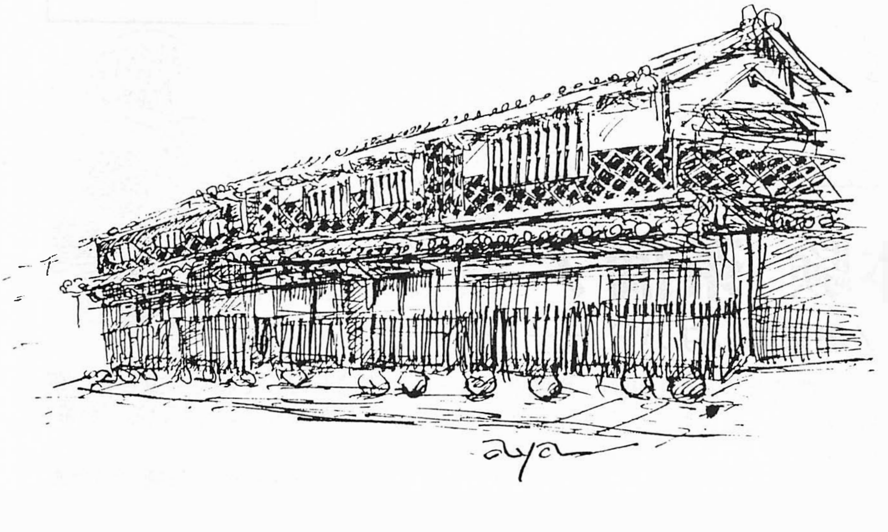


赤いクレパス号

帰りは再び船で、塩飽諸島の本島へ。江戸時代の民家を保存した地区は、撮影所の雰囲気も持つ。もはや廃墟となった空き家も住民で管理する程、行き届いている。

下津井、本島も古い町並みの上を瀬戸大橋が大きく手を広げている。不思議と違和感がない。集結された偉大な作品だからでしょうか。四国も瀬戸大橋の次は高速道路へ着々と工事が進み、遠く離れた山深い民家の横に、突然道路が走る景色に出会うことでしょう。道路の下に、何百年も人を見守った木や百数十年の民家も一瞬にとり壊され、消えるのを見ると胸が痛みます。

次回は、松山市の松江みどりさんでーす。



下津井の町並み

第2回あじさい祭

―― 君と歩こう　あじさいロード ――

と　き　　6月30日(日)　即売 10：00～18：00
ところ　　新宮村上山中野地区
主　催　　あじさいグループ

山里の村で１７年間、生活改善グループが丹精をこめて育てたあじさいは、約８００株延長２㎞に及ぶ村道に咲き競っています。

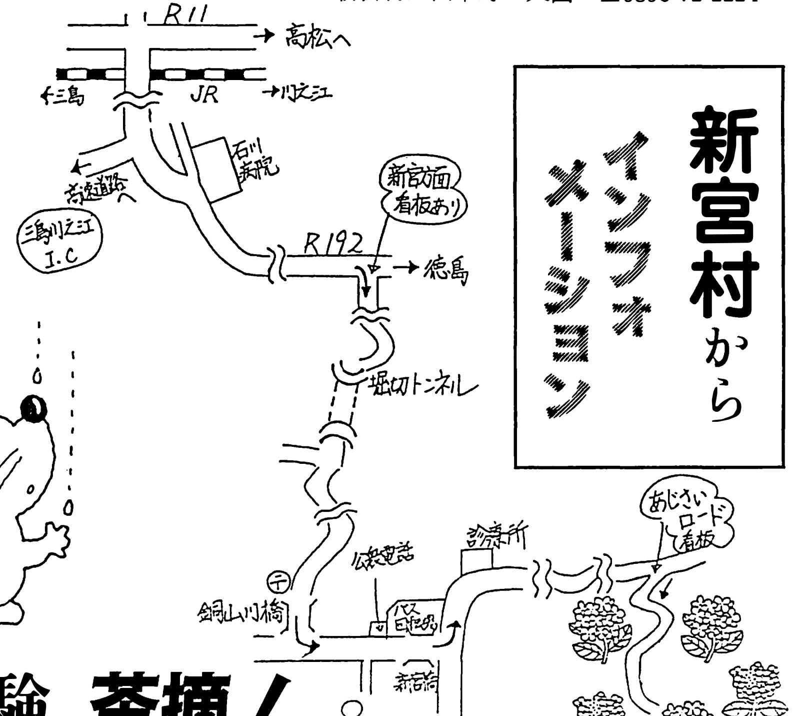
中野地区では、この素晴らしい景観を見ていただくために、第２回あじさい祭を計画しました。

当日は、特産の新宮茶や手づくりのあじさい見だんご、新宮漬けなどの加工品のほか、昔懐かしいわら草履などの工芸品も用意しています。

ぜひ、お友達を誘っておいでください。

お問い合わせ先　新宮村役場産業経済課　☎0896-72-2121
　　　　　　　　新宮村上山中野　大西　☎0896-72-2224

MAP



新宮村から インフォメーション

ザ・体験　茶摘！

―― あなた！お茶摘しない？ ――

昭和58年より無農薬栽培に取り組み、堆肥を主体とした肥培を行っており、虫とり、草むしりなど農作業は大変人手がかかりますが、少しでも安心して飲んでいただける〈お茶、健康的な食品〉をと励んでまいりました。

一昨年よりオーナー制をしき、皆さんとの対話を主体とした「ザ・体験　茶摘」の計画をしています。

家族と、友達と、職場の友人と、自然の中で一緒にお弁当を食べたり、近くを散策したり遊んだり、一日を新宮村でいかがですか？。

詳しくは、　新宮村上山中野　大西茶園　☎0896-72-2224

Town タウン

パソコン通信ネットワーク

拡げましょう ヒューマン ネットワーク

Vol. 16

Human Communication & Network

ECCC Ehime Computer Communication Club

えひめコンピューターコミュニケーションクラブ

知らないよりは、知ってる方がより楽しくなるECCCの操作。

今回は、マニュアルに書いてある操縦法を裏側から見たものを、いくつか並べてみました。

◇◇◇◇◇◇◇

最初にmore機能。

これは、画面表示が一杯になると自動的に一時停止するものです。

最初は、ONになっていますが、ダウンロードが出来るようになれば、OFFにして一気に読み落とし、電話を切ってから読んでしまう方が、電話代が安上がりです。

どうしてもちょっと読みたい時には、通信ソフトがサポートしている逆スクロール（各ソフトのマニュアル参照）か、CTRL+S（コントロールキーを押しながらSキーを押すこと、但し、ワープロ等では、別のキーに割り当てられていることがありますからハードのマニュアルを参照）を送ることで、一時停止させることが出来ます。続きを読むには、CTRL+Qです。

OFFにするのは、2.タウン住民課の4.オプションでできます。（マニュアル23頁）

◇◇◇◇◇◇◇

今読んだ文章は、どんな人が書いたのだろう?

こんな疑問に応えてくれるのが、2.タウン住民課の2.プロフィールの検索です。

ここでは、氏名・住所・職業・趣味・IDで検索することが出来ますから、何か一つの項目が解っていれば、確かめることが出来ます。

しかし、同じ趣味を持つ仲間はいないかなと、キーワードを入れても全角と半角、大文字と小文字全てを別のものとして検索しますので、趣味がパソコンと書いている人を探そうとすると、パソコンとパソコンの最低二回は、調べる必要があります。

当然、自分の項目になにも書いていないと、他の会員さんが、検索した場合に、まったく検索されないことになりますから、書かないのも権利ですけれども、相互のコミュニケーションの為には、是非ともお勧めしたいところです。

（マニュアル54頁）

◇◇◇◇◇◇◇

検索は、メインストリート等のボードでも使うことが出来ます。

検索できる範囲は、ボード単位です。例えば、喫茶TOWNとかまちづくりサロン等が一つの単位になります。

使い方は、1.読む を選んで何番のメッセージを読みますか。という表示のあるところでSを入力することで、キーワード或は、作成者のIDか名前で調べるという操作になります。

（マニュアル52頁）

しかし、メッセージがたまっていなければ、検索する値打ちが、少なくなりますし、メッセージがあまり多いと検索にかかる時間は、相当長いものになります。

ですから、この件でも、ダウンロードをお勧めしている理由になると思いませんか?

電話を切っているのならいくら検索に時間がかかっても電話代の心配はいりませんものね。

◇◇◇◇◇◇◇

とにかく、ダウンロードは是非マスターしましょう。ファイルにして貯めておくと、いろいろと利用できるうえに、電話料金の節約等、メリット一杯です!

（柴田 悟）

地域づくり 学んで三年 よもやま話ノート

第八話／『何かが道をやってくる…』話(3

喜多郡「五十崎町商工会」事務職員 宮本俊一

[癒しの里の心象風景をみつめる…]

「わが町を『癒しの里』と称んでみる…。そうすると風景がみえてくる。人の顔付きがみえてくる。『癒しの里』の風景。それはどのようなものであるか…？」

湯布院戦略／第三のキーワード（旗）を、中谷さんの訴えから、私流の勝手な理解で略記すると、このような言葉から始まる…次のような内容となりました。（原文とは若干違います。）

× ×

『癒しの里』という言葉から喚起される心象風景をみつめるところから始めよう。『癒し…』には、やさしい響きがある。くぼんだところを埋めてくれるやわらかさがある。風のそよぎに似たナイーブさがある。「これでいいよ…」という充足がある。「より豊かに…」といった「ヨリヨクの思想」がない。（中略）「フツーの町」であり続ける。それが癒しの里の『顔』だ…。

フツーの町で退屈せず、日々エネルギー充分に活力豊かに生きる。その豊かさをどうやって手に入れるか…？どうやって食ってゆくか…？「ガンバラなくて良い、フツーの町であり続ける…」という町の社会構造はどういうものであるのか…？いままでは農業で食ってきた。土を耕し、そこからタツキを得てきた。自力更生。ガンバル向こうに虹がみえてくる。だからガンバロー、だからムラオコシ…、そのような図式であったのだ。

「町は宇宙星群のような精密な引力関係で成立っている」と述べた。自分が「そこで光り続ける」ということは、自分が関係するあらゆる星たちとの引力関係によるものだ。もちろん遠近は問わない。ユフィンが光り続けるのは、ほかのムラたちとの引力関係による、ということだ。それは、ほかのムラたちにとって、ユフィンがナニモノであり続けるか、という問いにほかならない。ガンバッて生産性を挙げればいい…、というものでないことは自明なのだ。

ユフィンはほかのムラたちにとって、ナニモノであり続けるか…？視点が定まれば答は簡単だ。『癒しの里』であり続ける…。

[鍛えに鍛えて洗練された思想]

つまり、長期ビジョンで示された…『バザール（市場）のある温泉リゾート村構想』がそれなんですネ。第六話で紹介した…「湯布院はムラである。リゾート村とは、滞在型の保養ムラを言う。それを快適なものに育てあげてゆく構想だ…」の思想を、端的に表現されたのが『癒しの里』なんでしょうネ。

しかも、この思想は短くみても…昭和四六年『明日の由布院を考える会』を発足された直後の六月。志手康二・溝口薫平・中谷健太郎のお三人がバーデンバイラーをはじめ、ドイツの温泉保養地を四、五日の日程で調査された見聞を滋養として、「明日の由布院」を素描された原構図を核に、あの成長経済爛熟期の疾風怒濤の時代を闘い抜かれた実践で、鍛えに鍛えて洗練された思想なんです…。

しかもその七年後。中谷さんたちは町長・町議を含む二〇人たちとバーデンバイラーを訪ねられ、前回お世話になられたグラテヴォルさん（ホテルのご主人で町会議員）から「きみたちは約束を守った…」と、その間の実践を評価されたばかりか、次のような素晴らしいアドバイスも受けられているんですネ。

「きみたちは長い道を歩き始めたのだ。世界中どこの町でも何人かの人が、あるいは何十人、何百人かの…けっして多くはない人たちが同じ道を歩いている…」「ひとりでも多くの人が、よその町をみることが大切だ。そしてその町を造り、営んでいる『まじめな魂』

に出会うことが必要だ…」と。

鍛えに鍛えられたと言えば…、私が好きな中谷さんの言葉に、『活動は平常住生です』というのがありますが、その前段に「知ってもらうことと、わかってもらうこととは違います。わかってもらうにはそれだけの人間的スリアワセが要る。それは生理的なものだから時間がかかります。智恵や努力で時間を値切ることは出来ない…」があります。

これは、昭和五七年七月三日から一〇月一五日まで町民代表五〇人が、町長の「コミュニティーセンター建設」の諮問に答える『一〇〇日シンポ』を行い答申されたんですが、答申は全く採用されなかった…。その総括報告の一節の言葉なんです。真夏の暑い盛りに…それぞれの生業をこなし、ご存じ湯布院／イベント夏秋の陣で走り廻りながらの一〇〇日間シンポです。そして結果は不採用なんです…。しかし、「それでもやっぱりやってよかった…」と総括される鍛え方なんです。

このように見てくると、短い物差しで大きな物は計れない…。もはや湯布院の人たちの大きな実践が語る言葉は、一言一句おろそかに扱えない。それも一番大切な『癒しの里』の核心的思想とあれば…。中谷さんはじめ湯布院の方や読者の人たちには、ご無礼の極みながら、この項の締めは中谷さんの原文そのままの転載をお許し願うしか途なしです。

［社会構造に成り立つ癒しの行為］

人を癒す…。癒すことによって、自分も癒される。「競争」や「戦い」や「管理」の原理のない町。競争し、戦い、管理に疲れた人たちが、「癒し」を求めてこの町にやってくる。そんな町として地球上にキッチリと位置づけるのだ…。そのために一二億円もかけて健康温泉館を造った。

「歓楽」や「ぜいたく」や「貧欲」を受入れることのない町。「ヨリヨク」や「ガンバリ」の思想や仕掛けがない町。人間が生きてゆくのに、必要にして充分のものがあり、たっぷりの時間と、たっぷりの空間と、そしてたっぷりのホスピタリティがある。それで充分だ。それがユフィンの産物なのだから…。

それらがユフィンから光となって地球のムラムラに照り返ってゆく。そんな町であり続けることによって、ユフィンは食っていく。人が…、世界中の人がそれを求めているからだ。また町に住みついた人も、町を訪れた人も同じようにそれによって癒され「良い人生」を手に入れることができるからだ。

たっぷりの時間と、たっぷりの空間は社会的に用意できる。ホスピタリティはどうするか？　「癒してあげる…」ほかはない。「癒してあげる…」という能動行為だけがホスピタリティを実態化する。すなわち「生産」する。「癒して貰う…」という受け身の行動は「消費」であるから、そこに社会的構造として「癒し…」が成り立つ基盤がある。オマケに「癒してあげる…」行動はひとを「癒す…」と同時に自分をも癒す。また「癒された…」人はその経験によって「人を癒す力」を自らも身につける。この再生産機能が「癒し…」という個人的行動を社会化する。だから「癒しの里」は存在しうる。ホスピタリティが融合再生産される町だ。

もちろん、実態はモノである…。空間である…。食べものであり、建物であり、道であり、山であり、川であり、空である。しかもそれらを計画化し、育み、茂らせ、花咲かせる土壌は「癒しの思想」によってのみ肥沃に保たれる。それなしの開発計画はただの「テーマパーク」造りになってしまう率が高い。田園が、畑が、温泉が、商店が、市場が、旅館が、役場が、そしてもちろん病院が、「癒しの里」を体現するため再計画されたとき、ユフィンは希少な「フツウーの町」として地球上にしっかりと引力づけられるはずだ。

×　×

希いは色々あって始めた「よもやま話」ですが…、諸々のお詫びと感謝を込めて中断します。表記の通り全く新しい仕事に就きましたので、地域実践のお勉強に集中します。

明日の地域づくりと私の夢

㈱LAT環境設計事務所
檜皮孝夫

私にもささやかな夢があります。仕事に関するものと自分の人生をどう生きていくかという二つのことです。

(1) 夢の処方

夢が実現していない三十才の頃、私は次のようなことを考えていました。

夢十訓
・夢は同時に五つ以上持て。
・夢は自分だけのものと覚悟しよう。
・夢は人に語れ。語ることで夢はふくらむ。
・夢はまず第一歩を踏みだせ。できること

砥部で私がしたいこと、していること

誰と	内容	必要な人と環境	今、私は
家族	家族だんらん		・私の時間、努力が足りない。仕事、家庭、趣味とのバランスが悪い。
	静かで平和な生活	・もう少し静かな砥部町 ・団地のアプローチが寂しい	・近所つき合いが少ない。 ・道路に花を植えたい。少しずつやろう。
	子供との遊び	・公園、ピクニックのできる所（花の拠点、自然の山、川、海）	・子供との時間が少ない。 ・田舎（土居町）へも、もう少し帰る回数を増やして、田舎の土地で農業も少しやりたい。
個人で	焼き物	・砥部焼きについて語ってくれる人と聞く仲間	・見る目を養い、良い物が見分けられるようになりたい。（自分の作品で食を楽しむ程の余裕も技術もない。）
	作詩	・読者	・真民さんの影響で少しずつ発表させてもらっている。
	雑文書き	・読者	・少し書いて発表させて頂いているのを今年自費出版をする。
	絵・デザイン		・日曜日に子供と一緒に絵を描きたい（漫画、スケッチなど）と思う。 ・異業種の人たちで、新しい愛媛の屋外製品を作りたいと考えている。
	庭づくり、園芸	・市民ファーム	・いろいろな果樹を作り、果実酒を作りたいので、農地を手に入れるか借りたい。 ・公園で樹木の種を拾ってきてまいたことがある。また砥部川に菜の花をまいた。どこか町内に花も植えたい。
仲間と	健康づくり	・温水プール（松山にある）	・朝風呂はしているので、水泳をやりたいと思っている。
	砥部について知りたい	・自然環境、歴史について教えてくれる人と聞く仲間・ 砥部川を考える会（事務局を募集中） ・仲間が集まれる所、家 ・アートの里づくり	・砥部を歩く会をつくり、歩きたいと思っている。 ・２年つづいた会は継続したかったが、忙しくてできなくなったので、事務局を募集して再開したい。 ・町内のワザシをさがして、仲間として活動することやいろいろなことを教わりたい。 ・今後もできるだけ頑張る。

から実現しろ。

・夢は実現するまでの戦略を持とう。

・夢は行き詰まったら、人に相談しよう。何とかなる。

・夢は、何はなくとも、情熱と時間があれば実現できるものである。

・夢は他人にも協力を求めて前向きの集団を作ろう。

・夢は行き詰まったら、時間をあけて再度チャレンジしてみよう。

・できない夢はいつまでも考えるな。それが運命である。

(2) 今の私は

今私は砥部町に住んでいます。そしてとにもかくにも、次のような行動と反省をしながら生きています。夢が少しずつ実践され、行動へと変わってきたことで、自分の後半の人生を生きていくことの目標が少し見えてきたような気がいたします。

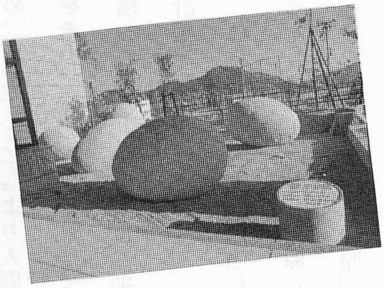
自分一人では何もできないということや家族の大切さを知るようになった反面、仕事の方法や興味の方向が大きく変わりつつあり、そのような不安も大きくなってきています。

また、都市計画や公園を作るコンサルタントとして、この砥部町に何が必要かを考えている時と、自分が本当にこの町で生活するために必要なものは何かということに、大きなずれがあることに気づき愕然としています。

「本当のまちづくりとは何か」ということをあらためて考えさせられている次第です。

(3) 今、私の夢は

人生を後半へ向けて歩き始めたころから、「私の夢」は「どうしてもやらねばならぬこと、やりたいこと」へと変わりつつあります。できないことにいつまでも憧れていてもどうしようもなく、どんなに小さいことでも自分でできることだけが全てという気がしております。そして、それが自分であり、たとえつまらない自分であっても励ましながら生きていくしか方法はないように思っています。



卵

卵は明日を夢みて
今日を精一杯
生きて行きます
この地で
心おこして

君は何を抱いているか

夢とかぎりある友がいる
あちらに一人　こちらに一人
明日を一緒に悩んでくれる友がいる
そんな世の中で
この身を技術と社会と
時間の流れに献上し
ものを造っていこうと思う
貧しさをおそれはしない
ただ、未来へ向ってのロマンが
何時までもこの友や社会と共に
あることを望み
ものを造っていこうと思う

平成3年度 事業計画
－H.3.4.1～H.4.3.31－

㈶愛媛県まちづくり総合センター

㈶愛媛県まちづくり総合センターは、県内各地の〝まちづくり〞とか〝むらおこし〞などと呼ばれている「地域づくり活動」をお手伝いする立場から、活力と潤いに満ちた二十一世紀の愛媛を創造していく基盤づくりのため、地域ごとに〝より人間らしい暮らし〞を希い、息の長い地域づくり活動の土壌が培われることを目指し、平成三年度の事業計画を定めます。

なお、事業の実施に当たっては、「地域づくりは、人なり」の原点と、「地域のことは、地域に学べ」の原則を踏まえて、有志活動者のネットワーキングを基本に、柔軟な試行錯誤のローリング方式で進めたいと思います。

一、基本的な考え方

当センターは望ましい〝地域づくり〞の活動像を、仮説ながら次のように描いて当面の事業を推進して行きます。

地域づくりの活動は…、

(1) 地域の人びとが、〝より人間らしい暮らし〞を希い、

(2) 身の回りの「生活自治」を原点にして行われる活動であって、

(3) 時代に応える「地域生活の創造」をテーマとした住民活動と、

(4) 住民自治をベースとして「地域経営」を進めて行く自治体行政が、

(5) 協働で行う「地域自立」を目指す〝共生と連帯〞の活動と考えます。

二、モットー

『地域の元気はくらしの元気　くらしの元気は地域の元気』

三、方針

(1) 「地域づくり／本物求め路線」の実践的な研究活動を集積します。

地域づくり有志活動者のネットワーキングを基本に、実践課題の研究と交

流を通じて〝より人間らしい暮らし〟を目指す地域づくりの原点を探る活動を進め、その集積を図ります。

(2) 地域の人たちの〝やる気おこし〟が焦点の地域活動を支援します。

一般的な地域活動の支援は、「自分のことは、自分でする」地域づくりの原点を踏まえて、地域の人たちの〝やる気おこし〟に焦点を絞り、地域の内発力を高める事業や方法を選択し、その支援活動に努めます。

(3) 交流と創造を生む コミュニケーション型 情報活動を充実します。

地域づくり活動の実践に役立つ〝ヒトの想い〟のこもる情報を中心に、その共有が新たな交流と創造を生むことを期待して、『コミュニケーション型情報活動』の展開を工夫し、努力していきます。

四、事業

(1) 「地域づくり／本物求め路線」の実践的な研究活動の集積

① 地域づくり研究サロンの開設

時々の地域活動の課題を「事例話題」として、マクロな視点と時代予測を踏まえ、専門家等助言を受けながら「地域づくり／本物求め路線」を研究する、地域の有志活動者を中心メンバーとした、開かれた柔らかい『地域づくり研究サロン』を、継続的に開設します。

② ミニシンポ／課題別研究集会の開催

地域の有志活動者が、地域活動の〝本物求め〟の主要課題を掲げ、より専門的に研究する勉強会を計画して手を挙げれば、その地域で事例研究を希望する各地の有志活動者も参加できる『この指とまれ』方式の実践的な『課題別／ミニシンポジウム』を開催します。

③ 地域の広域的「本物求めイベント」等への支援

地域の〝手づくりイベント〟は、地域づくりの有力な手段となるので、その仕掛人の人たちを貴重な資質の地域活動者として支援し、それが地域づくりの〝本物求め路線〟に通じるイベント誘導策となっていくように努力します。

④ 「仮称／地域づくり文化講演会」の開催

広く県民を対象に、地域づくりのノウハウや先進的な事例を提供し、地域づくり〝本物求め路線〟の活動を研究し、事後の活動展開の高まりを希う『仮称／地域づくり文化講演会』を開催します。

(2) 地域の人たちの〝やる気おこし〟が焦点の地域活動の支援

① 地域づくり助言システム事業の実施

地域自立を目指して頑張る地域の有志活動者を対象に、先進地域の実践者等の「助言グループ」を継続的に派遣し、地域問題の実践的研究活動を行い、地域活動のプロデュース機能づくりを支援すると共に、これらの研究発表と〝やる気おこし〟を高める『交流集会』を開きます。

② 地域づくり先進地交流研修ツアーの派遣

新時代の地域活動を担う、若い活動者たちの新たな〝やる気おこし〟を希い、十五人で編成する研修グループを、異文化ギャップがあり、高いレベルの実践者と濃密に交流ができる先進地を選び、「交流研修ツアー」を実施します。

(3) 〝交流と創造〟を生む コミュニケーション型 情報活動の支援

① 個別需要に対する情報サービスの整備

面談・電話・FAX・手紙等の個別的な情報需要に、短時間で適切に応えるため、集積してきた情報の整理・加工等に努めるとともに、情報需要の把握と県内外の新規情報の収集を行い、情報センター機能を整えます。

② 地域活動者向け情報サービスの拡充

(ア) 機関誌「舞たうん」の充実

地域の活動者を常時ネットワーキングするメイン・メディアとして、「えひめ地域づくり研究会議」と共刊している、情報誌「舞たうん」の内容を、活動者相互が交流し融合して、独自のものを発掘する場となるよう一層充実していきます。

(イ) イベント機関誌『えひめイベン

トBOX』の充実

県内各地のイベントの総合的な紹介誌として、「㈶愛媛県市町村振興協会」と共刊している『えひめイベントBOX』を、よりきめの細かな地域イベント情報の提供を目指し、充実していきます。

(ウ) 主要資料の刊行物化と活用

ミニシンポ／課題別研究集会、先進地交流研修ツアー等、センターの各種事業に伴う諸資料を始め、全国レベルの主要資料等を刊行物とするように努め、地域活動者の活用に供するとともに、五周年を記念し、センター案内書及び記念誌を発行し、センター活動の情報発信を行います。

③ その他の情報サービスの整備

(ア) パソコン通信ネットワーキングの実用実験

新しい情報メディア「コミュニケーション型パソコン通信」を、地域づくり活動に活用する実用実験活動を、「えひめコンピュータ・コミュニケーション・クラブ」との協働事業で継続します。

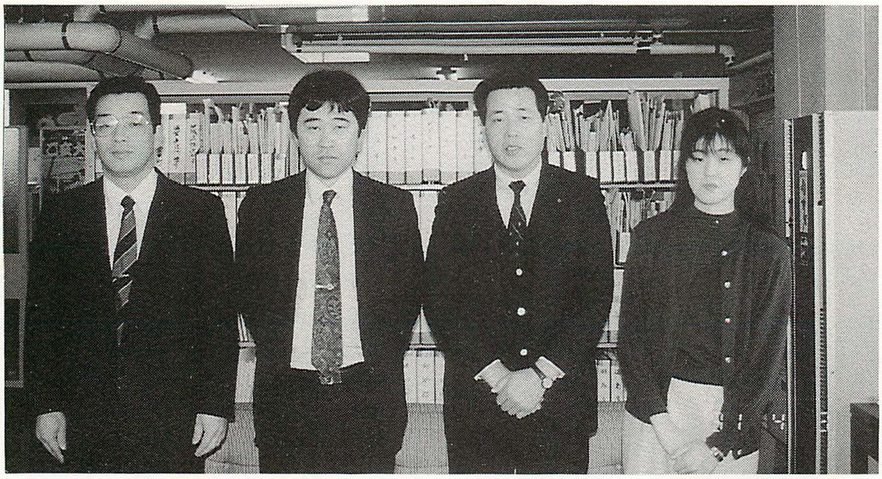
(イ) 貸し出し用／地域づくり研修用ビデオ等の整備

「先進地域活動」等のビデオや、「専門講師等の講演」録音テープ等を順次整備し、地域活動者が容易に活用できるように充実していきます。

(ウ) 地域づくりの一般的な啓発行事の支援

一般啓発的なフォーラム等の地域づくり集会への支援要望には、計画への助言や講師の斡旋等を通じ、行事後の活動おこしを支援します。

まちづくり総合センター
人事消息



研究員	研究員	主任研究員	事務員
上ノ田　誠一	国田　敦彦	松森　陽太郎	安田　佳可
（中山町役場）	（西条市役所）	（愛媛県庁）	

●４月１日付けで活動の拠点が変わりました。これからも宜しくお願いします。

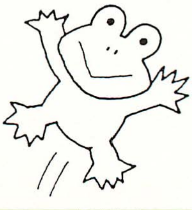
・主任研究員　山本幹男
（愛媛県庁）

・研究員　豊田　渉
（中島町役場）

・研究員　石川元英
（川之江市役所）

◎退職事務員　宇都宮　真理子

▲ 平成２年度　センター職員
（後列、左から）豊田、石川、山本、宇都宮、山岡
（前列、左から）宇都宮＜真＞、渡邊所長、毛利



「青春」心はずむこの言葉
あの顔も　この顔も
同じ光に輝いている
青春は一つの丘だ
限りない人生の野原が
君たちの回りに広がっている
あの山へか　あの湖へか
それともあの花園へか
いや　どこへでもいい
さあ歩きだそう
その若々しい足取りで……

まちづくり活動の情報誌として、この「舞たうん」を隔月で発行しています。

内容についてのご意見や活動内容についての記事がありましたら、気軽にお寄せください。

「舞たうん」編集係
二人のMs.（毛利・安田）まで
〒七九〇　松山市道後一万一の二
㈶愛媛県まちづくり
総合センター
TEL
〇八九九（二五）五五五七
FAX
〇八九九（二五）六六八〇

発行・平成三年四月十五日
えひめ地域づくり研究会議
㈶愛媛県まちづくり
総合センター